様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年　４月　２４日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18500642
研究課題名（和文）　摂食障害者の食に対するストレスから考察する食の意義と食教育への応用

研究課題名（英文）　Meaning of food considered from stress to person with eating disorder's food and application to food education

研究代表者
高橋　ユリア（TAKAHASHI YURIA）
大妻女子大学短期大学部・家政学部・准教授
研究者番号：80236330

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：生活科学・食生活学
キーワード：食　ストレス　摂食障害　教育　毛髪　亜鉛　放射化分析

１．研究計画の概要

教育現場にいる人間として、教育の中での食というものを、どうとらえ、どのように発展させていくかを、摂食障害者の食に対するストレスから考察する。

放射化分析により摂食障害者の毛髪中亜鉛濃度とストレスとの関連を検討する。

毛髪中の亜鉛濃度とストレスとの関連結果を摂食障害学生に提示する事による教育的指導効果について検討する。

他の摂食障害者及び、摂食障害者の家族による本指導方法の評価を求める。

聞き取り調査等に協力してくれる摂食障害者及び家族の全員に調査協力の承諾は得られている

２．研究の進捗状況

摂食障害学生の毛髪中亜鉛濃度が標準値に近づくと過食が減り、精神状態も安定する傾向にあった。

これらの結果を本学生に提示し、教育的指導した結果、さらに精神的安定を促した。

本指導方法の評価を他の摂食障害者に、聞き取り調査した結果、摂食障害者の多くが、自分の精神的状態を数値で明確に提示される事への評価を認めた。

摂食障害者の家族、特に母親からの評価が高かった。

専門医やカウンセラーではなく、学生という立場であれば、日常接することの多い、教師を言う立場の人間が、自分の食に対する対応に対し、関心を持ってくれるという観点に高い評価が得られた。

食を通して全ての価値観を決定する傾向にある摂食障害者にとって、食に関心を持っている教師に出会う事は重要である事が考えられた。

すなわち、複雑化する社会状況に伴い、食教育の重要性も高くなると考えられ、その指導方法の確立は重要である事が示唆された。

３．現在までの達成度

③やや遅れている

（理由）

本研究は研究代表者が長年の摂食障害者との交流により、本心を語ってくれるまでの調査協力の承諾を得ている事で成り立っている。すなわち、摂食障害者一人一人との聞き取り調査を中心に行っている為、時間を要する。

４．今後の研究の推進方策

摂食障害者及びその家族達から、聞き取り調査により、食に対するストレスをさらに収集していく。

それらのデーターを分析する事により、食の持つ様々は側面を明らかにし、食の意義とは何か、を追求する。

さらに、教育現場の中において、食というものを、どうとらえるかを、摂食障害者の食に対するストレスから考察し、食教育への有効利用へと発展させる。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　０件）
〔学会発表〕（計　０件）